



自動車事故対策機構 (NASVA) 重度意識障害者専門病床 —多職種連携で支える—



本年2月1日より、NASVA委託病床の入院患者さんの受け入れを開始しました。開設にあたり、岡山療護センターの見学や備品・運用マニュアルの整備、担当看護師の人選など多職種で協議を重ね、体制を構築してまいりました。

医療チームは、患者さんの現状を的確に把握し、継続的な脳への刺激を可能な限り与え続け、僅かな反応を引き出す「あきらめない医療」を掲げています。

看護部

病床は仕切りを最小限にしたワンフロアシステムを取り入れ、効果的な治療や集中的な看護の提供に努めております。療養環境は、1日の時間経過や季節の変化を五感で感じていただけるように整備し、日常生活をより快適に過ごせるよう環境づくりに取り組んでおります。

また、同じ看護師が一人の患者さんを継続して担当するプライマリー・ナーシング方式の看護体制を導入し、僅かな回復の兆しや変化を捉えることを目指しています。今まで以上に患者さんやご家族と向き合う時間が持てるので、それぞれの目標達成のために、個別性を踏まえた支援をすることが、24時間関わる看護師の役割と考えております。

「安心できる療養環境」を提供し、患者さんやご家族の方々と喜びを共にしながら、回復へ向けて尽力してまいります。

(3N病棟 副主任 隅岡えり)

リハビリテーション室

脳損傷による重度の後遺症(遷延性意識障害・四肢麻痺等)に対し、「遷延性意識障害の改善」を目指し、理学療法、作業療法、言語聴覚療法を実施します。

理学療法・・・筋緊張、関節可動域を評価し、関節可動域訓練、筋緊張の抑制・促進等の運動療法を行います。また、基本動作、座位保持、立位保持、歩行においても残存している身体機能に応じて理学療法を実施し、介助量の軽減や身体機能低下の予防を目的に援助を行います。

作業療法・・・意識障害に対する覚醒刺激の提供や機能に応じた上肢・手指機能訓練を実施し、生活動作につながるように援助します。また、ベッド・車椅子ポジションニング等の環境調整や必要に応じて装具や自助具の作製も行います。

言語聴覚療法・・・コミュニケーション訓

練、摂食嚥下訓練を中心に実施します。コミュニケーション訓練では、患者さんの視線や表情変化を促しながら、意識的な言語理解・表出向上を目指します。摂食嚥下訓練では、咳嗽反射・呼吸・嚥下反射のタイミングを確認しながら、耳鼻咽喉科医の指導の下、摂食嚥下チームの介入も仰ぎ、積極的にアプローチしていきます。(言語聴覚士 北村広志)

放射線室

NASVA委託病床に入院中の患者さんにおいて、特に注力している検査がMRIと核医学です。

MRI・・・最新鋭機種のGE社製「SIGNA Architect」磁場強度 3Tを使用して、MRトラクトグラフィ(脳神経線維を画像化する手法)という撮像を追加で行います。

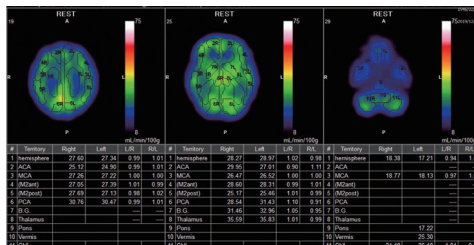
核医学・・・最新鋭機種のGE社製「Optima NM/CT640」とRI(Radiolotope)を使用して、脳の血流量の画像化を行います。

MRI、核医学はCTに比べて検査時間がかかるので、他の検査部門、職種と連携を取りながら、スムーズな予約、正確な検査ができるよう画像センタースタッフが一丸となって取り組んでいます。

(主任補 高須賀弘喜)



MRトラクトグラフィ



脳血流量定量検査画像

生理検査室

神経学的検査として、脳波(EEG)と誘発電位の検査を行います。

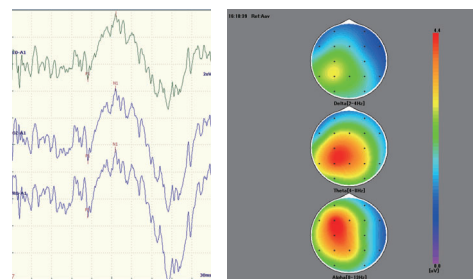
脳波(EEG)・・・色分けされた脳波マッピングを用いた分かりやすい表示をすることで、患者さんのご家族への説明に役立っています。

誘発電位・・・音刺激を用いた聴性脳幹反応ABR(Auditory Brainstem evoked Response)、フラッシュ光刺激を用いた視覚誘発電位検査VEP(Visual Evoked Potential)、電気刺激を用いた体性感覚誘発電位検査SEP(Somatosensory Evoked Potential)を上肢・下肢に実施します。

神経学的機能の維持・回復の指標の一つとなるよう、検査室として協力してまいります。(主任 荻家久美)



VEP検査の様子



VEP検査の波形

脳波マッピング

地域医療連携室

交通事故に遭い、治療を受けられる患者さんには、急性期から回復期、そして社会復帰への移行期など、治療過程と並行して、医療費の支払い、示談、後遺障害補償といった諸手続きを進めていくことが求められます。

そうした患者さんやご家族が抱える不安は、交通事故後の時間的経過とともに変化していきます。また、その時々状況に応じて、社会保障制度も多岐に渡り、手続きが複雑になる場合もあります。交通事故被害に遭われたご本人やご家族が今後必要となってくる社会資源の情報提供を適宜行うとともに、医療ソーシャルワーカーとして、退院後に安心して生活を送れるよう、相談に応じながら、在宅介護時の福祉制度利用などを見据えた最善の生活再建をサポートしてまいります。

(社会福祉士 課長補佐 三谷直紀)